

青年国際交流事業の効果検証に関する検討会（第1回）議事要旨

1 日 時：平成27年5月27日（水）15:00～17:00

2 場 所：中央合同庁舎第8号館共用C会議室

3 出席者：

（委員）牟田座長、池上委員、井上委員、白木委員、竹尾委員、源委員

（内閣府）安田内閣府青年国際交流担当室長、
矢作内閣府青年国際交流担当室参事官
大部参事官補佐（青年国際交流担当）

（オブザーバー）

日本青年国際交流機構副会長 大橋玲子氏

4 概要：

（1）開会

牟田座長 挨拶

- ・ 国のお金を使う事業については、検証をして、いろいろと御意見があったときには、それにすぐ対応ができるということを、常日ごろからやっておくことが大事。そのような意味で本検討会において1年間の活動をまとめるということは大変結構なこと。

（2）事務局説明

- ・ 配布資料に基づき、事業及び評価の概要について説明。

（3）意見交換（主な発言）

- ・ 1年後のフォローアップ調査だけでなく、ある程度のインパクトを見るため、5年とか、10年経ってからのフォローアップが必要。また、それぞれの調査時期で、調査すべき項目を選別する必要がある。
- ・ 本日の配布資料のアンケート項目の中には、35日ぐらいのまとまった船上研修がないと効果が出にくいものもあるのではないかと。
- ・ 1カ月ぐらいのまとまった期間、狭いところで熱い交流をするというのが、やはり一番効果があって、それを陸上のオリエンテーションや、船に少しの間乗って、飛行機で海外へ行くとか、そういう組み合わせでは、代えられないものがあるのではないかと。
- ・ 日本参加青年と外国参加青年の陸上研修前から船上研修後における各能力の伸び率（資料6参照）を見ると、日本青年は顕著に伸びている。リーダーシップや問題解決能力などは、短期間の研修でさほど伸びるものではないので、意外に感じる。
- ・ 日本参加青年の伸び率が高い理由として、事前の設定値を控えめに低く設定している傾向があるのではないかと。
- ・ リーダーシップや企画力というのは、確かに簡単に上がるわけではないが、主観的に上がったと思うことはあり得る。例えば、自分はどうもリーダーシップが

ない、あるいは自信がないと思っけていても、否が応でも話さなければならなくなると、結構できるのではないか、頑張っけて話せば人もついてくると感じることはある。もう一度、データを見れば、例えば自信がついた人は、リーダーシップも高くなっけたと言っけているということはあるのかもしれない。

- ・ 毎年調査する必要はないが、経年観察は絶対にやるべきであり、どのような手法で行うことが効果的なのか考える必要がある。
- ・ 改善のための評価には、どこがうまくいき、どこがうまくいかなかったのかという分析が必要になり、その場合、定性的なデータはとても貴重。
PDCAサイクルを回して行くのであれば、アウトカムのデータは同じ指標で毎年拾いつつ、実施のプロセスなどに関する関係者や受講者の様々な意見を定性的なデータとして分析することで、次のアクションの改善につなげていく仕組みがあるとよい。
- ・ リーダーシップ・セミナーがあるが、受講者のコメントを見てみると、リーダーシップが重要だと思っけたというのは、セミナーの受講だけではなく、コース・ディスカッションをはじめ、様々なイベントに参加して、感じている向きもある。それらを有機的につなげたプログラムを考えるべき。
- ・ 自由記述について、バックグラウンドと切り離されている。日本青年か、外国青年かというカテゴリーだけでなく、例えばどの国からの参加青年かということぐらいは情報としてあつたほうが、理解しやすいのかもしれない。
- ・ 英語でのコミュニケーションは不自由がないが、どういう点で足りないものがあるのかが分かつると、実際に使える英語になっていき、国際交流にもつながら、日本のグローバルな活動にも資するのではないか。
- ・ 学生以外の社会人などの参加青年にどう応募してもらうか。様々なカテゴリーのところから参加が得られれば、もっと効果が出る可能性がある。
- ・ 基本は自己評価で、周りにいる講師などが、定性的な評価として、クライテリアごとに点数をつける、グループで見ると相対的にどのぐらい改善したかを見るというやり方がある。例えば、グループで見ると、全体のまとめ感、最初いまま一つだったが、随分伸びたというやり方。それに自己評価を組み合わせることで、ある程度問題が見えてくるのではないか。
- ・ 船という閉鎖空間に大勢の人が一緒にいるというのは、明らかに非日常空間であるので、そこから戻つた日常でどう生きようとしていくのかという視点の調査ができるかというのではないか。グローバルに自分たちで生きていこうというある種の覚悟は、何日のプログラムであればできるのか。そこをうまく探る方法があるとよい。

(4) 安田内閣府青年国際交流担当室長 挨拶

- ・ この数年間、青年国際交流事業については、平成24年度の行政事業レビュー等を中心とする、外部からの御指摘を踏まえ、たびたびの見直しを図つてまいつたところ。そうした見直しに基づき、平成27年度は1カ月を超える船上研修と海外への寄港を伴う、次世代グローバルリーダー事業、シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズを実施することになった。事業の本来の目的である青年リーダーの育成、我が国と諸外国との関係強化に資するためには、これまで行つてきた事業の評価を適切に行い、また、改善点については、速やかに反映させるといふ、いわゆるPDCAサイクルを適切に回して行くことが、大変重要。本検討会にお

いては、グローバルユースリーダー育成事業を中心として、平成 26 年度の国際交流事業について、全般に効果を検証していただくとともに、今後の適切な測定指標のあり方についても、御議論をいただくことになる。引き続き御支援・御協力をいただきたい。

(5) 閉会

- ・ 次回、第 2 回検討会は、6 月 11 日 (木) 開催予定。
- ・ 客観的に船に乗って物事を見ることができる人間もいたのではないかという指摘を踏まえ、今回は実際にそういう立場で船に乗った者で適切な者からヒアリングを行う方向で調整することとなった。

以上